

## 第二百四話 戦争終末構想の破綻後の終戦構想、終戦機会の捕捉

敗者としての戦争終結、終戦工作は如何にあるべきか、極めて難しい課題である。天皇、宮中・重臣グループ、海軍、陸軍の各アクターの思惑の交差する中での日本の終戦であった。

### 1 当初の戦争終末構想の概要とその破綻

日本の当初構想は、英国及び蒋介石政権との個別的な講和を求めつつ、米国との条件付き講和を求めるといったものだった。その為に、①連合国のSLOC破壊作戦 ②独とのアフリカ及び中近東での連携による対支、対ソ補給路を遮断 ③ ビルマルートの遮断、重慶政権に対する圧迫と対支和平策の断行 が必須だった。が、それは悉く破綻し、更にカサブランカ会談（1943/1/29）で、連合国が枢軸国の無条件降伏を求めることを決定するに及んで、日本は敗者としての終戦を如何に迎えるかに直面することとなった。

### 2 防勢作戦間における終戦機会の捕捉

独による連合軍の撃破も期待し得ず、日本としては軍事的には、防勢作戦を行いつつ、連合国側の連携の乱れを突いての条件付き講和を求める以外に方法はなかった。つとめて長く持久するはずの太平洋正面の作戦の戦況進展が早く、終戦機会の捕捉は出来なかった。和平機会補足の狙った条件作としての「一撃和平」構想も、それを行うには日本は既に破断界を超えていたのかも知れない。

### 3 終戦工作等について

結構早い時期から模索していた者も居たが、枢軸国の敗色が明らかになるにつれ、如何にして終戦を迎えるかが関心事項となり、色々な終戦工作が行われた。

#### (1) 終戦工作の例 (Wikipediaによる。)

- ・燕京大学学長ジョン・スチュワートや上海市長周仏海を仲介者とする和平工作。
- ・日本軍今井武夫参謀副長と中国国民軍何柱国上将との和平協議。
- ・水谷川忠麿男爵（近衛文麿の異母弟）と中国国際問題研究所何世楨との和平工作。
- ・駐日スウェーデン公使ウィダー・バッゲを仲介者とするイギリスとの和平工作。
- ・小野寺信駐在武官によるスウェーデン王室を通じる独自の工作
- ・スイスにおけるアメリカ戦略事務局のアレン・ダレスを仲介者とした岡本清福陸軍武官・加瀬俊一公使や藤村義朗海軍武官らによる和平工作。

これらはいずれも和平条件の問題や日本側による仲介者への不信、時機などから、実現には至らなかった。

#### (2) 海軍の終戦研究そして陸軍

海軍省教育局長高木惣吉少将は、米内光政海相、井上成美次官の密命により終戦研究を多彩な英知を結集して行った。各方面と連携をとりながらの終戦への基盤づくりを行った功績は大きいとされる。陸軍も参謀本部戦争指導班が、戦争終結構想を模索していたが、その焦点はソ連要因であった。宮中・重臣グループの動きも次第に急となった。

#### (3) 対ソ和平交渉

小磯内閣の後継内閣として、1945/4/7 天皇（と木戸内大臣）は鈴木貫太郎を指名し、終戦工作がその任務であった。独の降伏は5/7であった。5/8 最高戦争指導会議は、ソ連に和平斡旋を求めることに決した。ヤルタ会談でソ連参戦は決定しており、ソ連に翻弄されて、実を結ぶことなく徒労に終わった。ソ連仲介案は無理との情報はあったが、日ソ中立条約の有効性を信じて疑わなかった故にソ連に斡旋依頼をした。他に方法がなかったのは解るが、何故と思わざるを得ない。

- \* 軍事的敗北必至という状況下での主体的終戦工作は至難である。軍事的に互角かそれに近い状況でなければ和平機会は訪れないだろう。そのような時期に終戦を策するには偉大なるリーダーシップが必要だろう。
- \* 我が国の終戦は、天皇の聖断なくしては出来なかっただろうし、聖断なき終戦であったならば、大混乱・パニックを招来しただろう。

(第二百四話 了)